



公益財団法人SAJ

SAJ Farm 通信

vol.23
2012年 6月号

公益財団法人
School Aid Japan
〒144-0043
東京都大田区羽田 1-1-3
TEL: 03-5737-2773
FAX: 03-5737-2793
<http://www.schoolaidjapan.or.jp>
sajinfo@schoolaidjapan.or.jp

水田の準備

今年も例外なく雨の降る季節がやってきました。辰年は、「雨の多い年」という言い伝えを証明するかのようには昨年より1ヶ月も早い5月から雨の降る日が多くなりました。

この雨のおかげで、半年間トラクターで耕すことも難しいくらい硬くなっていた土も、ようやくやわらかくなり、6月の水稲作付けに向けて準備を始めました。

この雨季に水稲の作付けを予定している水田の数は7枚です。面積にして合計約110アール。その内3枚はモデル区の水田となります。今までは約15アールでしたので大きく作付面積を増やします。

そこで、モデル区に関しては、去年以上に特化して取り組んだことが3つあります。1つ目は昨年までは1枚の水田のみ(約15アール)の作付けでしたが、今回のモデル区では3枚の水田全て(約45アール)に作付けをするということ、2つ目は、作付け前の水田にはモミガラ、ワラ、鶏糞をそれぞれの水田に違った方法で散布したこと、3つ目は、水田への土の流入や雑草の侵食を防ぐために水田周囲にトタンを埋めたこと、以上です。



モデル区の水田に壁のように埋められたトタン。

水田の準備にはもう1つ大事な作業があります。それは苗を育てること。今回は昨年よりもずっと作付面積が増えることから3回に分け、保険も兼ねてたくさん播種をしました。

播種した品種は「セン・ピダオ」と呼ばれるもので昨年と同じものです。カンボジアで品種改良され、最近よく出回るようになってきた品種です。

現地スタッフと話し合いをし、育苗の期間は約20日としています。15センチ位の丈の苗を目指します。カンボジアでは通常30センチ以上の苗にして植えています。私たちの苗は、なるべく勢いのある若いうちに植えることをしたいからです。それでも日本の苗よりも長い理由は、田植えの準備をする際に水田から苗を引き抜き束ねることになるからです。

準備は全て手作業で行います。唯一機械を使うのは、トラクターで水田を耕す作業です。今年は現地スタッフのチャンダーにもトラクターに乗ってもらっています。緊張した面持ちで運転をしています。初めは、障害物の確認や真っ直ぐ運転するために前方を、そして耕された状態を確認するために後方を交互に目視しなければいけないため、彼が思っているように進みませんでした。しかし、今ではそんなことも少なくなってきました。



少々緊張気味にトラクターを運転するチャンダー君。

今回の準備では、特にトタンを埋める作業には時間がかかりました。鍬やスコップで穴を掘り、深さ 30 センチほどの溝にトタンを入れてから埋め戻すという作業が何日も続きました。雨が降ると涼しくなるのですが、それはほんの一時のことです。体全体を使うこの作業はジリジリと照りつける太陽によって体力を大きく消費します。それでも現地スタッフの二人は黙々と作業を進めてくれました。

今年のモデル区の水田には重大な役割が課せられています。それはこの雨季（例年ならば 6 月ころから 12 月ころまで）に 2 回作付けをするということです。

2 回作付けるための予定は次のようになります。

作業内容	1 回目	2 回目
育苗	5 月中旬～6 月上旬	9 月中旬～10 月上旬
田植え	6 月上旬	10 月上旬
生育管理	6 月上旬から 9 月下旬	10 月上旬～1 月下旬
収穫	9 月下旬（10 月上旬）	1 月下旬（2 月上旬）

1 回目から 2 回目に移行するときは非常にタイトなスケジュールとなりそうですが、先日実験した乾季の水稲の作付けが思うように行かないことがわかった今、どうにかして成功させなければなりません。

また、雨が降るようになってから始めていることがもう 1 つあります。それは今回は水田として利用しないところに陸稲を播くことです。この作業は未だ土壌改良の足りない水田に対して昨年引き続き行います。何かしらの作物を作り続けていくことで土が変わっていきます。そしてこの陸稲のような作物で土を覆うことは照りつける太陽や雨からなどの外からの影響を大きく緩和してくれるからです。

昨年の様子から種を播いてから 2 ヶ月ほどで鋤き込むことができるようです。鋤き込むことで今度は土の中にいる微生物が土を耕してくれるのです。その後 1 ヶ月くらいで再び種を播き何回か繰り返し行いたいと思っています。

このように雨が降り始めたおかげで充実した毎日となっています。しかしこのような状態が乾季においても続かなければなりません。そして子どもたちにより多くのお米や野菜を届けたいと思っています。

編集後記

「雨」とはすごいものです。どんな最先端の灌水設備も雨にはかないません。そして「雨」は全ての生き物を喜ばせます。人間も例外ではありません。もちろん多すぎる雨は災害となってしまうのですが、乾季を過ごしてきた私たちにとっては「恵みの雨」です。飯島